

## GRIPケララ社創立される

去る2007年3月17日15時より（@東京都練馬公民館）、特定非営利活動法人（NPO）「世界の地域から企画ケララ社」の創立総会が開かれました。

この前身はNGO「日本ケララ友好協会」であり、創立総会に先立ち同「友好協会」を正式に解散し、その財産を承継する旨確認されました。創立総会には、大勢の人々が参集し、目立つところでは、熊本、愛知、宮城、インドのケララ、北部インド、そしてアメリカ合州国からも駆けつけてくれました。会員には、インド・ケララを始め、イギリスにも在住しているものがおり、「世界の地域から」の実質が整いつつあります。

みなさまのご協力に感謝するとともに、いっそうのご支援をお願いしたいと思います。

## 「野麦越え」とは

実は、創立大会後の懇親会の席上、理事長島岡が大学教授として長年（30余年）にわたって授業の一環として、野麦峠（岐阜県一長野県境）の旧道を学生やOG/OBと共に実踏してきた「野麦越え」とケララの「内発的発展」とはどのような関係にあるのか、という質問を受けました。

野麦峠というのは山本茂実著『あゝ野麦峠』（新潮文庫）によって、世に知られるようになった峠であります。それは飛騨（岐阜県）地方の農山村の少女たちが、雪の中を険しい山道と峠を越えて、はるばる長野県諏訪湖畔の平野村（その後岡谷市）まで製糸業工場に出稼ぎに行きました。頃は明治30年代から40年代前半が最盛期でした。ぼくたちの「野麦越え」とはその道筋のうちもっとも難所の部分、約25キロの道を方位磁針と2.5万分の1の地図を頼りに山林の中の旧道を発見しながら、実踏することを言うのです。

なぜこのような（体力と危険を伴う）ことをしたのかと言うと、製糸業（絹糸を紡ぐ）が、「富国強兵」という名の日本型産業革命を支える外貨獲得の最も重要な戦略的産業だったことにあります。

最近、過度に江戸時代の再評価（美化）が行われていますが、それを割り引いても、当時日本には見るべき産業がろくになかったにもかかわらず、日本の産業革命がなぜアジアに先駆けて可能だったかといいますと、なんと言っても当時の世界を見渡しても、江戸時代の遺産として、日本の識字率（含計算力）・就学率は群を抜いて高かった（比較が難しいのですが、きわめて長命だったともいわれています）という労働力の質にあります。また出生率も低く抑えられていました。民衆の質素、勤勉、学習熱と好奇心の旺盛さは多くの訪日外国人の文書に残されています。そのことと関連して、日本の企業家が勇気と知力を振り絞って世界市場に挑戦したという「企業勃興熱」があります。この上下の産業熱狂は、何も当時の支配者の意図によったものではなくて、その意図を超えて、下部から盛り上がったものであります。

女工を搾取と抑圧の面からだけ捉えては一面的です。「哀史」は確かに「哀史」だったのですが、それは現代から観てそうなのであって、その時代の逆巻く渦の中で、彼女たちの青春の熱狂もすさまじかった事実を抜きにして、雪の野麦峠を超えられるものではありません。

ぼくは「野麦越え」を熱狂的に継続したのは、それを通じて、たんなる「哀史」としてではなくて、青春のエネルギーを学生と共に燃焼させることを、学び、学ばせたかったからです。

## ケララの今

他方、ケララの現状はどうかといいますと、就学率や識字率、英語能力は他のアジア地域に比較して群を抜いていること、衛生状態がいいので平均余命も同様に最高であること、出生率は適度に抑えられているが若者の人口がきわめて多いこと、人々の学習熱はものすごく、親の教育熱心は驚嘆に値します。良くも悪くも学習熱がすごく社会問題にさえなっています。大学への進学率もきわめて高いと言えます。それと関係するのですが、ケララ社会での中間階級の企業勃興精神はきわめて旺盛で、一種の「企業勃興」熱狂が支配しているかのように見えます。

それに引き替え、貧困層が大きく、失業率（とりわけ女性で高学歴の失業率）がきわめて高く、一人当たりの州民所得はインドの諸州の中でも中の下という状態です。産業は第1次産業とIT産業が盛んですが、その他の産業は見るべきものがありません。州民男性の多くはインド北部や中東の油田地帯に出稼ぎ労働をして自宅に送金してやっと暮らしています。他方、カースト制が強く、女性は結婚できて一人前ですが、その際巨額の「持参金」を用意しなければなりません。したがって（というのも変ですが）、自殺率がきわめて高いのも特徴です。

ぼくたちがケララを歩いてまず印象的であるのは、物乞いがいないということ、人々が好奇心旺盛で無私で親切だということです。きわめて誇り高い州民です。

つまり、州民の質は高いし誇りも高いが、貧困であるということです。

## 「野麦越え」とケララ

以上のような理由で、ぼくは今ケララの状態が、あたかも明治の「野麦越え」時代の様相を呈していると思えるのです。急いで申し添えておきますと、ぼくは、ケララを日本と比べて100年「遅れている」などと言っているのではありません。逆に日本が失っているものが、今ケララにあるということでもあります。

ぼくは、「野麦越え」に象徴される日本全体の産業熱が帝国主義に帰結したことを知っています。また戦後日本のそれは、すさまじい公害と自然破壊です。ケララの現状はその轍を踏まないと確信します。ぼくらがケララを見る目は、日本が選んだ道ではない道を選んでもらいたいが、そのためには、まったく日本とは異なった社会的経済開発が要求されると思うのです。まったく新しい開発モデルを実現してもらいたいです。それにしても、ケララで決定的に重要なのは、やはり教育＝学習熱のすさまじさです。この行く末をさまざまに交流と研究を通じて見つめて行きたい、そうすればこれからの日本の社会的経済開発の方向性も見えてくるのではないかと思うのです。